修士論文（要旨）
2017 年 7 月

自律的な学習を目指した授業における自己評価活動が果たす役割の考察
―日本語学習者の視点による分析を通して―

指導　齋藤　伸子教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
215J3902
黄　金兪

Master's Thesis（Abstract）
July 2017

The Role of Student Self-Assessment Activities in Classes Aimed at Autonomous Learning: An Analysis from the Perspective of Japanese Language Learners

Jinyu Huang
215J3902
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

第 1 章　はじめに 1
1.1　研究背景 1
1.2　研究目的 2
第 2 章　先行研究 3
2.1　学習者オートノミー（learner autonomy） 3
2.2　自律的な学習を目指した実践形態 4
2.3　自己評価 4
2.3.1　自己評価の定義 4
2.3.2　評価訓練の必要性 5
2.4　自律的な学習における自己評価 5
3 章　チュートリアル 7
3.1　チュートリアルの考え方 7
3.2　授業の説明 7
3.3　実践の流れ 7
3.4　自己評価のマテリアル 7
3.4.1　当科目で使用する学習記録シート 8
3.4.2　当科目で使用する自己評価シート 8
第 4 章　調査概要 9
4.1　調査協力者 9
4.2　調査方法 9
4.3　調査項目 10
第 5 章　分析 11
5.1　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ 11
5.2　カテゴリー、概念、定義および代表となる具体例 13
5.3　モデル図 20
5.4　解析 21
5.4.1　【初体験】 21
5.4.2　【最初の壁】 21
5.4.3　【サポート】 21
5.4.4　【教育形式に対する気づき】 22
5.4.5　【試行錯誤】 22
5.4.6　【一貫性のある自己評価活動】 23
5.4.7　【意義付け】 23
5.4.8　【心配になる自己評価能力】 24

5.4.9　【虚偽の評価】 25
5.4.10　【自己評価の習慣がつかない】 26
第6章　考察 27
6.1　リサーチクエスチョン①について 27
6.2　リサーチクエスチョン②について 27
6.2.1　【初体験】 27
6.2.2　【最初の壁】 28
6.2.3　【心配となる自己評価】 29
6.2.4　【虚偽の評価】 30
6.3　リサーチクエスチョン③について 32
第七章　まとめと今後の課題 34
7.1　まとめ 34
7.2　今後の課題 34

参考文献
巻末資料1 研究承諾書
巻末資料2 分析ワークシート

学習者オートノミーが世界的に議論されている中、本研究は、学習者オートノミーの考えを基本方針とする授業で行われている、学習者による自己評価活動について考察するものである。本授業では、自己評価の方法として、学習者には授業ごとに学習記録シートを、学期末には総合的な自己評価シートを記入するよう求められている。しかし、学習者が実際と食い違った自己評価を行う場合もあり、自己評価活動の意義に対する疑問も生じる。

本研究では、自己評価が学習者オートノミーの育成に必要不可欠な一部（トムソン 2008・小山 1996 など）と見做し、①学習者が自己評価活動をどのように認識するのか②自己評価活動について問題点を感じている学習者がいた場合、それはどのような問題点なのか。③自己評価活動はどのように学習者の学習者オートノミーの成長に繋がっているのかを明らかにすることを研究目的とした。また、リトル（1991）・リトル（2011：51）などを引用し、学習者オートノミーを人間が生来的に所持するオートノミーを活かしたものとし、学習者オートノミーとは自分自身を距離を置いて見ること、批判的内省、意志決定、及び人に頼らずに行動するための能力だと定義した。本研究では、自己評価活動が学習者オートノミーの成長に有意義だという実践報告（土屋 2008・纐纈 2013・市嶋 2009・片桐 2014 など）に対して、それらの研究が教師によって行われた研究であるため、学習者が本音を伝えていたかどうかに疑問を呈し、同じ学校で勉強している先輩と後輩という比較的近い関係から調査した。分析には質的研究法である修正版グランデット・セオリー・アプローチを用い、5 名の学習者のインタビューデータを分析した。分析結果から、以下のような結果を得た。

まず、本研究の協力者にとって、自律的な学習を目指した授業（チュートリアル）及び、一学期間の自己評価活動は初体験であった。この初体験の授業形式に対して、積極的に受け入れた学習者もいたし、消極的な受け入れを見せた学習者もいた。消極的な受け入れをもたらした主な原因は「自己評価活動に必要を見出せない」と「書き方が分からない」というものであった。当科目では、学習者それぞれの学習目標に向かって学習活動を行っていたが、その間に、教師が絶えずに援助を提供していた。初体験の授業に慣れるにつれて、教育形式に対する気づきが学習者の中で起こった。その気づきは学習者のチュートリアルの意義付けに働きかけた。また、教師の援助を受けながら、学習者は不慣れな自己評価活動への試行錯誤を行った。一貫性のある自己評価活動に参加するうち、学習者には自己評価活動の意義づけができた。

一方、自己評価活動の問題点も見られた。具体的には、「評価基準が不明確」や「他人の意見が気になる」という学習者の自己評価能力への不安と、「過大評価」、「過小評価」、「成績づけへの躊躇」、「見栄えを気にした評価」という学習者が行った虚偽の自己評価であった。また、一学期の履修を終えた後、学習者は自己評価活動を継続に行わないと表明したこともあった。自己評価活動による学習者オートノミーの促進に関しては、学習者が学習過程に能動的に参加する傾向および、セルフモニターを行うようになったことがあげられる。さらに、一人で勉強するのではなく、教師の援助を自ら求めることも見られた。自分の学習者に能動的に参加すること、セルフモニターを行うこと、および自ら教師に援助を求めることから、自己評価活動が学習者オートノミーの促進に繋がったことが分かった。

本研究は、研究立場を学習者に近い関係に変え、学習者の自己評価活動に対する認識のプロ

セスを明らかにすることができ、より学習者の本音に近づくことができた。自己評価活動がよりよく改善するために、このような学習者の本音を聞く研究が必要不可欠だと稿者は考える。

参考文献

青木直子・中田賀之（2011）「学習者オートノミー」シリーズ言語学と言語教育第 23 巻、青木直子・中田賀之編　ひつじ書房　序章 pp. 1 - 22

安彦忠彦（1994）『自己評価：「自己教育論」を超えて』日本図書文化協会

市嶋典子（2009）「相互自己評価における学習者の認識と学びのプロセス」『日本語教育』142, pp. 134-144

市嶋典子（2013）「日本語教育における評価研究の変遷と課題―制度が規定する評価から、実践を起点とした評価、思想としての評価へ―」『言語文化教育研究』第11号pp. 112－133

オレック, アンリ（2011）　「言語学習におけるオートノミー　単一教育パラダイムか　2 つの教育パラダイムか」シリーズ言語学と言語教育第 23 巻、青木直子・中田賀之編　ひつじ書房　第１部　第１章、pp. 25－44

小山悟（1996）「自律学習の一助としての自己評価」『日本語教育』88号　日本語教育学会 pp. 91-103

石川勤（1975）『学び方学習の授業入門』明治図書出版社

石川勤（1995）『学び方授業のすすめ方』小学館

梅田康子（2005）「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割―学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る―」『言語と文化：愛知大学言語教育研究室紀要　第 39 巻　12 号』pp. 59-77

桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」（2007）『自律を目指すことばの学習 さくら先生のチュートリアル』凡人社

梶田叡一（1994）『教育における評価の理論Ⅲ』金子書房

梶田叡一（1995）『教育評価』放送大学教育振興会

梶田叡一（2010）『教育評価』第 2 版補訂 2 版 有斐閣

片桐準二（2014）「JF 講座受講生のポートフォリオに対する態度変化の過程－受講生インタビューの分析から－」国際交流基金日本語教育紀要 10、pp. 7-22

木下康仁（1999）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂

木下康仁（2007）「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M -GTA ）の分析技法」『富山大学看護学会誌』　第 6 巻 2 号 pp. 1-10

関崎友愛・古川嘉子・三原龍志（2011）「評価基準と評価シートによる口頭発表の評価―JF 日本語教育スタンダードを利用して―」『国際交流基金日本語教育紀要』第 7 号, pp. 119-133

田中望・斎藤里美（1993）　『日本語教育の理論と実際』―学習支援システムの開発―　大修書店

土屋真理子（2008）「自律的な学習を目指した教室授業における自己評価シートの役割」『桜美林言語教育論叢』4、pp. 1-13

リトル

ディビッド（2011：51）「学習者オートノミーの実践」シリーズ言語学と言語教育第23巻、青木直子・中田賀之編　ひつじ書房　第１部　第2章、pp. 51 - 89

トムソン木下千尋(2008)「海外の日本語教育の現場における評価―自己評価の活用と学習者主導型評価の提案―」『日本語教育』第136号,pp.27-37
中田賀之（2015)『自分で学んでいける生徒を育てるー学習者オートノミーへの挑戦ー』第1部「学習者オートノミーとは何か」ひつじ書房pp.17 - 54

白頭宏美・久保田美映（2010)「自律的な学習に向けた自己分析作業―自己評価と振り返り―」桜美林言語教育論叢 / 「桜美林言語教育論叢」編集委員会 編　第6号　pp.77-90
橋本重治（1983)：指導と評価「教育評価基本用語解説」,「自己評価」の項, 日本教育評価研究会誌臨時増刊号, 29（8)，38,
纐纈憲子（2013)「自律学習者養成を目指した学習者参加型評価の試み」CAJLE Annual Conference Proceedings
札野寛子(2005)「自己評価票を利用した日本語教育プログラム満足度評価」『言葉と文化』第6号,pp.13-33
三宅若菜（2006)「自律学習を基盤とした日本語授業における教師の役割―「チュートリアル」の学習記録から」『桜美林言語教育論叢』第二号、pp.105-115. 桜美林大学言語教育研究所
横溝紳一郎（2002)「学習者参加型評価と日本語教育」細川英雄（編)『ことばと文化を結ぶ日本語教育』pp.172-187. 凡人社
若林功（2015)　「グラウンデット・セオリー・アプローチ―労働研究への適用可能性を探る」特集・労働研究と質的調査

John Trim,Brian North,Daniel Coste（2004)『外国語学習、授業、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』吉島茂、大橋理枝、奥総一郎、松山明子、竹内京子　訳　朝日出版社
Little,D(1991)Learner autonomy1:Definitions,issue,and problems.Dublin:Authentik

参考URL
青木直子（2009)「学習者オートノミー概論」『2009年フランス日本語教師会研修会』http://www.let.osaka-u.ac.jp/~naoko/jlp/pdf/handouts/Paris2009.pdf　(2016年5月20日にアクセス)
青木直子（2010)「学習者オートノミー、自己主導型学習、日本語ポートフォリオ、アドバイジング、セルフ・アクセス」https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/reserch/201003.html (2017年6月16日にアクセス)
青木康彦・有光興記（2013)「「見栄張り」と自己に関する研究」日心第77回大会 http://www.psych.or.jp/meeting/proceedings/77/contents/pdf/2EV-016.pdf (2017年6月20日アクセス)
木村富美子（2006)「学生の相互評価における自己評価と他者評価のに関する分析―プレゼンテーションに演習における試み―」

http://libir.soka.ac.jp/dspace/bitstream/10911/943/1/KJ00005454738.pdf（2017年7月3日にアクセス）
国際交流基金　「CEFR　Can-do一覧」
https://jfstandard.jp/pdf/CEFR_Cando_Category_list.pdf（2017年6月13日にアクセス）
国際交流基金　「JF日本語教育スタンダード」https://jfstandard.jp/summary/ja/render.do（2017年６月12日にアクセス）
周萍（2009）「地域の日本語教室をやめた中国人学習者のケース・スタディ」
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/6487/1/21-07.pdf（2017年6月12日にアクセス）
武一美・市嶋典子・キムヨンナム・中山由佳・古屋憲章（2007）「活動型日本語教育における評価のあり方について考える」『WEB版日本語教育実践研究フォーラム報告』http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/take.pdf（2017年6月17日にアクセス）
二宮理佳（2017）「自己内省ワークシートの効果－自己調整学習理論からの分析－」
http://ir.c.chuo-u.ac.jp/repository/search/binary/p/9583/s/8051/（2017年6月27日にアクセス）
ヨーロッパ言語共通参考枠組み
https://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/01-3.pdf（2017年6月13日にアクセス）
若林功（2015）「グランデット・セオリー・アプローチ―労働研究への適用可能性を探る」
http://www.jil.go.jp/institute/zassi/backnumber/2015/12/pdf/048-056.pdf（2016年12月25日）